

# 椎の苗木通信



夢・力・花いっぱい

木城町立木城中学校

Tel 0983-32-2028

Fax 0983-32-4191

木城の明日を担う心豊かでたくましい人づくり

(木城町教育大綱の基本理念)

## 第71回体育大会を終えて

➤ 青団団長 3年 大山 晴幸くん

僕は初めて団長をしました。最初は、簡単にまとめられると思っていたけど、実際は全然まとめることができませんでした。体育大会前日まで団員をまとめることができなかったけど、リーダーや3年生は、僕を全力でいつもサポートしてくれたので、とても助かりました。

体育大会当日は、青団全員が声を出して団を盛り上げてくれました。競技では、最初に1年生が団技で勝利したおかげで流れにのれて、その後順調に勝つことができました。Double 優勝はできませんでしたが、競技の部で勝利できて良かったし、応援も赤団には負けていなかったと思います。

僕は団長として思うようには務められなかったけど、青団の一人一人が最後まで僕についてきてくれたことはとてもうれしかったです。実行委員会、リーダー、団員のみんなのおかげで中学校最後の体育大会がとても充実していて、最高の思い出になりました。ありがとうございました。

➤ 青団副団長 3年 鈴木 萌香さん

私が副団長ということが決まったとき、うれしい気持ちもあったけど、それより団長のサポートができるのか、自分が1,2年生をまとめら

れるのかなど、ほとんど不安な気持ちでした。

練習を始めた頃は、みんなの気持ちがバラバラで、練習をするにも集まらないし、真剣に練習に取り組む人も少ない状況で、私の不安は一層募るばかりでした。

しかし、体育大会本番が近づくにつれて、一つになっていくみんなの気持ち、「勝ちたい」という思いが伝わる大きな声を出しての応援があり、私は自分自身気合いを入れ直して、最後まで全力を尽くそうという想いになりました。

体育大会の当日、午前中の1年生団技で青団が勝利してから、閉会式で団長が優勝旗を受け取る瞬間まで、私の心は感動のあまりウルウルしていました。中学校最後の体育大会で優勝できたことだけでなく、青団の一人一人と過ごしてきた日々は最高のよき思い出となりました。私は心から感謝の気持ちでいっぱいです。

みんな、ありがとう!

➤ 赤団団長 3年 久家 亮輔くん

第71回体育大会では、僕は多くの人に支えられたおかげで成功できたと思います。赤団は最初、忘れ物をする人が多く、行動面ではだらしかなかったり、まとまりがなかったりしていました。このような状況では、自分自身、団長を務められるのか正直言って不安がありました。

しかし、副団長やリーダーが一致協力して団

の悪いところを注意したり、応援練習では3年生やリーダーがチームワークで大きな声を出したりして、団の雰囲気盛り上げてくれたのです。

時には、練習で、失敗すると気落ちしてしまったり、辛いこともあったりしましたが、ある人の言葉を思い出しながら最後まで団長としての務めを果たすことができました。この団長の経験は、僕の一生の思い出となりました。赤団のみんなありがとう。

➤ 赤団副団長 3年 林 音々さん

体育大会を終えて私が今、思うことは赤団の副団長になれて、応援賞をとることができたことです。私が副団長に選ばれた時、嬉しさやわくわくする気持ちもありながら、副団長として団を盛り上げていけるのか、団長のサポートができるのかという不安がありました。

そして、いざ練習が始まってみると赤団は忘れ物をする人が多いし、応援練習では声を出さない人もいて、私の心の中は、不安と緊張と焦りでいっぱいになっていました。でも、半数の人は自分から団を盛り上げようと、応援練習でも大きな声を出してくれました。

その人たちのおかげもあり、本番では全員が盛り上がり楽しんで応援をしてくれたので、応援賞をとることができ、とても嬉しい気持ちになりました。みんなの協力のおかげで、私は副団長として最後まで頑張ることができました。私たちを成長させてくれた青団、指導してくださった先生方に深く感謝します。

☆ It was a wonderful athletic event. ☆

校長 雑感

洗練を狙うと、力強さと気迫が失われる

これは、古代ローマの詩人、ホラティウス(紀元前65~8)の言葉らしい。宮崎日日新聞の「ことば巡礼」というコラムで目にとまった。小説家の阿川大樹氏は、そのコラムで次のように述べている。以下、引用-----

必死になっている姿を他人に見られるのは、あまり格好のよいものではない。おそらく隙だらけだ。自分の事で精一杯で、他人を気遣う余裕もない。

それでも、全力を出し切らなければならないことがあり、それが大切なことであれば、格好をつけてなんていられない。できないことに挑まなくてはいけないこともあるのだ。

100の力でできることを、100の力しか持たない自分がやっとならざるなら、200の力を持つ自分であれば、50パーセントの力で楽にできるかもしれない。

汗もかかず、顔をゆがめることもなく、涼しい顔で背筋を伸ばし、さらりとやってのける。

もしかしたら、その方が洗練されて見える。10倍格好がいいかもしれない。

ただそうするために、自分にもっと力を付けようとするならば、そのための努力は並大抵ではない。どっちにしても、どこかで、汗をかかなくてはならないのだ。

そして、なにより、限界に挑んでいるときだからこそ、それまでの自分を超越る、思いも寄らない力が湧いてくることもある。---以上

先日の体育大会で、子どもたちの「本気」を見たような気がした。初めて中学校の体育大会に参加した1年生も、団長やリーダーをはじめとする先輩たちの熱さに圧倒され、気持ちを揺さぶられた生徒も多かったのではないだろうか。やっぱり、「一生懸命の姿」は美しいし、カッコいい。

さらに、そこに「余裕」の姿が見られると、カッコよさも、より洗練されたものとして写るのかもしれない。しかし、余裕をもってハードルをクリアするためには、それ以前に、その分だけ自分を高めておくことが必要であり、結局のところ、阿川氏の言うように、人はどこかで「努力」が必要なのだ。人知れずの「努力」なのか、そうでないのかの違いしかない。

子どもの頃、運動ができる人や勉強ができる人を、うらやましいと思ったことがある。中学生の中にも同じように感じている人いませんか？でも、そうではないんですよ。

人は必ずどこかで、必死にがんばらなければならないときがある。いつやるか…(人それぞれかもしれませんが)今でしょ！と言いたい。